

「ジェンダー差別をやめよう。」今では当たり前に言われている言葉で、聞いたことのない人はいないと思います。けれども「ジェンダー差別」は、やめようとしても私達の心の奥底に根付いているのではないのでしょうか。

当時の年齢も覚えていないような幼い頃、私は兄の影響で特撮ものやヒーローもののテレビばかり見ていました。よく読んでいた本も特撮ものでした。うろ覚えですが当時の私は兄と一緒に楽しんで見ていたと思います。

ある日、母と兄とパジャマを選ぶとショッピングに行ったときのことでした。私は勿論、兄と同じような自分が好きだったヒーロー系のキャラクターが印刷してあるパジャマを選びました。テレビのコマーシャルで見たときに、カッコいい、着てみたい、と思ったからです。母は選んだ私を否定はしませんでした。女の子が着ているような可愛いデザインのパジャマを持ってきて、「こっちの方が似合うよ。」と言いました。私は母のその言葉を何も疑わずにうのみにして、そちらの可愛いパジャマを選びました。自分に似合うならこっちのほうがいいのではと考えたからです。

また、保育園にいた頃、友人と特撮やヒーローものの話を共有したくて、話を振ったとき、「なんで男の子向けのものを見ているの?」と言われました。私はそれを聞いて自分が「変」なんだと思う、それ以来、女の子向けの可愛いアニメなどを見始めました。変だと思われる仲間外れにされなくなかったし、友達との会話を楽しめたかったからです。

他にも、私は小学校に入ったときあたりから兄のおさがりの上着

を着ていました。別に服選びなどに執着はなかったからです。服を自分で選ぶように母には、勧められましたが、正直、服屋に行くのが面倒だったという理由もあったので、ほぼ毎日兄のおさがりの上着を着て学校に行っていました。今思うと自分が思っているより、その上着が気に入っていたと思います。しかしある日、友人に「こういう可愛い服とか上着を着てみたらどう。絶対似合うよ。」と言われました。その子はクラスの中でもオシャレでセンスがいいと自分でも思っていました。その子が言うのならと私は兄のおさがりの上着を着なくなっていました。

今思うと当時の私はおかしいと思います。周りの意見に流されて自分が好きになったものを話せなかったこと。今の私なら、ありえなかったと思います。そう思えるようになったきっかけは、とある本の登場人物のセリフでした。「私の好きな服を着て何が悪いの? 自分の趣味を他人に否定される筋合いはないもの。」そのセリフを言ったのは、女性の心を持った男の人でした。このセリフを読んで、「他人の評価って気にしなくていいものなんだ。」と思えるようになりました。

けれども、子供は簡単に周りに影響され、受け入れてしまいます。さりげなく女の子らしい服を勧めた母を見て、男の子向けのテレビを見ていたことを変だと言った友人の言葉に影響され、可愛いほうが似合っているという友人の言葉を聞いて、いつしか私の心の奥には「女の子は女の子らしく、男の子は男の子らしく」という概念が染みついてしまっていました。勿論、誰も悪気はなかったと思います。母はよくわかりませんが、保育園の頃の友人はただ単に疑問に思ったことを訊いただけだと思います。小学校の頃の友人はアドバイスをしただけです。皆さんにも幼い頃に同じような経験があるかもしれません。そのことが、口では「偏見がない」と言っている、心の奥では「変」だと思っている原因ではないでしょうか。

今も、「あのことはおかしかったのではないか」と思う度、日常

生活でもおかしいと思うことが増え始めました。服屋での「メンズ」や「レディース」という分け方は、確かにわかりやすく便利だと思います。けれども、メンズのところは女は行きにくいように、変な目で見られやすいです。ドレスコードは、「礼儀を守る」という点では必要だと思いますが、心と体の性別が異なる人はどうしたらいいのでしょうか。したくもない恰好をしなければならぬのでしょうか。学校の規律を整える、という点では制服は必要だと思いますが、男の人がセーラー服を着ていたらきつと大半の人が「罰ゲームかなにかで女装をしている」と思うでしょう。セーラー服を「女の恰好」だと思っているからです。これらの違和感は全て、昔から私たちが当たり前のことだと教わったものです。「ジェンダー差別をなくそう」とは言われていますが、そういつた長年の伝統や考えから変えなければならぬのではないのでしょうか。

ジェンダー差別について改善するには、「今」の人達にも勿論必要ですが、「未来」を生きていく子供達に今までの当たり前を与えないようにすることが大切だと思います。そのためには、いづれ子供達の手本となっていく私達が「ジェンダー差別をなくそう」という言葉がなくなるように、多種多様な性が当たり前の社会に変えていかねばなりません。そして、今あるジェンダー差別をなくすために、子供達に教える立場の大人たちも、つまり、社会全体で、自分らしい性を表現できるように変わっていかなければなりません。

また、性を自由に表現している方のことを、「そういう人」と心の中で区別するのも私はおかしいのではと思います。「そういう人」だから、自分たちとは違う。そう思っただけで距離を取らずに、「これがこの人のあり方なんだ」と前向きに接するといくと私は思っています。もしかしたら先ほど私が言ったことは、考えの自由を否定しているのかもしれない。けれど、私はそうやって前向きに思う人が増えてほしいと思っています。

今、私達が未来のために、もう自分の性について悩まなくてもい

いように尽力し続けなければなりません。もう二度と、自分の好きを子供たちが変える必要がないように全員が考えていかねばなりません。「誰か」ではなく「自分」から変わる、これが一番大事なことだと私は思います。「自分から変わる」を誰もが繰り返していれば、きつと自分の性を固定されて苦しむ人はいなくなるでしょう。私はそれを信じています。